



話題の本棚

山下大地著『ヴァンパイア・リヴァンプド』

ハン・ガン著『光と糸』

特集／令和の漫画

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

ヴァンパイアの「当たり前」を見直した先に見えるものは

ヴァンパイア・ リヴァンプド

山下大地著
国書刊行会



◆そもそもヴァンパイアとは

蒼白く貴族のような出で立ちをして、夜ごと無垢な者たち（往々にして貞潔な女性）のもとへ現れては頸筋に牙を突き立て、追い詰められれば蝙蝠や霧に姿を転じて聖職者たちを翻弄する——ヴァンパイアと聞いて思い浮かべるのは、概ねこのようなイメージではないだろうか。

こうした吸血鬼像は歴史のなかで形作られたものだ。そもそもヴァンパイア（vampire）という名称はセルビアの一地方に伝わる民間伝承に由来し、ルーマニアのストリゴイ、ドイツ語圏のナーハツェーラと並ぶ、地域ごとに存在していた「蘇る死者」伝承の一種でしかなかった。ところが一八世紀、セルビアで起こった蘇る死者をめぐる事件（セルビア事件）が報告書や新聞、雑誌で取り上げられ、vampireの存在が西欧社会に広まった結果、東欧や南欧というヨーロッパの周縁地域における類似的怪物の総称として用いられるようになる（本書ではこれをヴァンパイアの「換称化」と呼ぶ）。そして地域ごとの差異は捨象され、「死後の蘇り」と「吸血」という最大公約数的な特徴のもとに画一的なイメージを与えられる——要するにヴァンパイアとは、言説によって構築された存在に外ならない。

◆セルビア事件とボリドリ——パラダイムの二つの転換点

本書はまず、〈ヴァンパイア紀元〉としてセルビア事件を位置づける。重要なのは、この事件に対する西欧側の言説が、周縁へのオリエンタリズム的な眼差しと不可分であるという点だ。当時のセルビアはオーストリアがオスマン帝国から獲得したばかりの国境地帯であり、村人たちがvampireに怯えて暴動に発展すれば国防が脅かされかねない。一八世紀、ヴァンパイアは国家の秩序のために——啓蒙主義や西欧中心主義的思考のもと——対処すべき問題であり、ヨーロッパ社会の権力勾配のなかで語られる存在だったのである。

一九世紀に入ると、ヴァンパイアは文学のなかに息づくようになる。その転換点がジョン・ボリドリ『ヴァンパイア』（一八一九）であり、ルスヴン卿というキャラクターこそ我々の知るヴァンパイア像の祖型である。本書ではそれ以前のテキストやシャルル・ノディエに代表される舞台化作品なども子細に検討しながら、キャラクターとして定着することになるヴァンパイア像の変遷を辿る。一九世紀のヴァンパイアは——特定の対象に対する恐怖や他者性を仮託されながら——テキスト同士の参照を通じて絶えず増殖してきた。

ヴァンパイアという言葉から、我々は当たり前のように特定のイメージを思い浮かべる。だがそのような「当たり前」こそ歴史的に築き上げられてきたものであり、ヴァンパイアは言説上の存在であるがゆえに、特定の他者への眼差しに寄生して姿を留める。

怪物は、それを語る者のなかに宿るのである。

（五）一六頁 税込三九六〇円 3月刊）

（猫足）

過去が現在を、死者が生者を救うとき

光と糸

ハン・ガン著
斎藤真理子訳
河出書房新社



そのようにして資料に沈潜していたとき、彼女が考え続けていたのは次の問いだった。

現在が過去を助けることはできるか？
生者が死者を救うことはできるのか？

二〇二四年、韓国の作家ハン・ガンはノーベル文学賞を受賞した。受賞時の年齢は五〇代半ば。それゆえ受賞の早さには驚きの声も上がったが、作品の質の高さを考えれば当然の受賞でもあった。そしてその後、ノーベル文学賞受賞後の講演・エッセイ・詩を彼女自身が編んで作られたのが本書である。彼女が一篇一篇の作品に込めた想い、そこで重ねられた苦悩、それが本書では語られる。

ハン・ガンが扱う題材はどこまでも重い。『少年が来る』で描かれた一九八〇年の光州事件、『別れを告げない』で描かれた一九四八年の済州島四・三事件、あるいは『すべての白いものたちの』で描かれた生後二時間でこの世を去った姉のこと。彼女の作品の中心にはいつも必ず死者がいる。そして彼女がひとつの事件を、ひとりの死者を、どこまでも深く辿ってゆく。

九百人ほどの証言を集めた本を手に入れ、毎日九時間ずつ、約一か月かけて読み終えた。その後、光州だけでなく他の国家的暴力に関する資料を、地域と時期を広げ、人間たちが世界いたるところの長い歴史の中でくり返してしてきた虐殺に関する本を読んでいた。

小説を書くことで過去の死者を救うことはできるのか——多くの小説家につき纏うであろうこの永遠の問い。しかし「資料を読めば読むほど、それは不可能だということがはっきりしていくように思われた」。ところが彼女はある文章を読んだとき、啓示のようにして悟る。これら二つの問いは向きを逆にすべきなのだ。すなわち、

過去が現在を助けることはできるか？
死者が生者を救うことはできるのか？

これが彼女の辿りついた問いだった。生者が死者を救うのではなく、死者が生者を救うということ。たとえれば、ウクライナで、パレスチナで、あるいはイランで、絶えざる戦争と虐殺が行なわれている今、ハン・ガンが描く過去の死者は現在の生者をどう救っているのか。光州事件で、あるいは済州島四・三事件で虐殺された者たちは、今まさに虐殺されようとしている者たちを救うことができるのか——。ハン・ガンのテキストとの対話を通じて、私たちはそのことを考えねばならない。たとえ痛みを伴おうとも。(はや)

(二二四頁 税込二二〇〇円 12月刊)

ダンジョン飯

九井諒子著
KADOKAWA

まず断言しておきたい。
『ダンジョン飯』は、この
世でもっとも面白い漫画の
一つである、と。アニメ化
(二期制作決定!) もされ
た本作が面白いのは、ある
意味当たり前かもしれない。
しかし、問題は面白すぎるということだ。



主人公ライオスは一行と共に地下のダンジョンを探検中、妹をドラゴンに食われてしまう。妹を胃袋に収め、地下深く潜ったドラゴンを追うライオス達。しかし食糧はすぐに底を尽く。そんな中、ダンジョンに長年住み込み、魔物(端的にはゲテモノ)を料理することに命を燃やすドワーフのセンシと出くわす。妹奪還のためダンジョンを攻略しつつ、道中で討伐した魔物をセンシが料理して腹を満たす——これが本作のあらすじである。

「ダンジョンの魔物を料理する」という一発ネタの爆発力にまずは驚嘆しよう。星雲賞(日本を代表するSF大賞)を取ったように、ダンジョンの魔物や生態系の作り込みは凄まじく、おまけにそのアイデアも多種多様(発想力という点では、八木ナガハル『無限大の日々』を想起させる)。特に現実世界の料理とのアナロジーの妙は一級品である。例えば、マンドレイクは栄養価が高くてオムレツでもかき揚げでも美味しく食べられるし、ゴーレムの背中は畑になる(不思議なもので、評者はこれを読んでから自炊に精を出すようになった)。発想力と類推による異世界グルメ漫画の新たな地平と言って差し支えないだろう。

思えば異世界人も我々も飯を食わねば生きてゆけないのは同じなのに、飯に焦点を絞った異世界漫画は不思議と描かれてこなかった。しかし思い起こそう。ダンジョン飯、それは食うか食われるかなのだ…… (倉井)

(全14巻 第1巻 税込792円)

特集

令和の漫画

おもしろい漫画が多すぎる!!

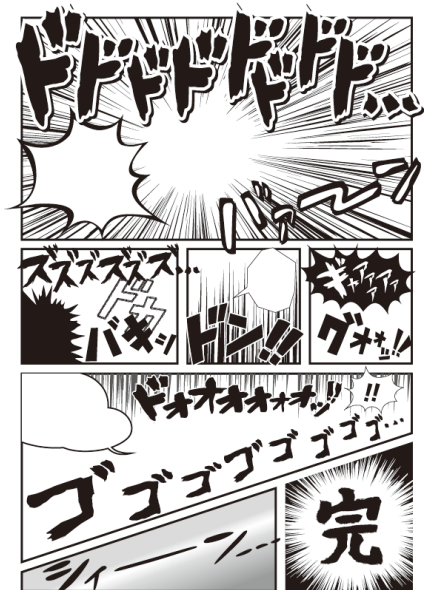
新しい漫画は次々生まれる。

だからといって古い漫画の価値は色褪せない。
おもしろい漫画はいつ読んだっておもしろい。
けれども同時代を生きる漫画を読む幸運というものはあるはずだ。

令和が始まり、早七年。

私たちが生きるこの時代、令和の漫画を、
いま、ここに。

(ひるね)



バンオウ—盤王—

綿引智也、春夏冬画楽著
集英社

AI が人を遙かに凌駕するようになった時代に、人はなぜ将棋を指すのだろうか。生成 AI が超常的な発展を遂げる中で、人には何ができるのだろうか。

主人公の月山は将棋をこよなく愛し、相当の実力を持った吸血鬼であり、人間社会に溶け込むためにひっそりと、目立たずに生きていた。しかし、馴染みの将棋教室が存続の危機にあると知り、優勝賞金 4400 万円を求めてタイトル戦の一つ竜王戦を目指す。基本的にタイトル戦はプロ棋士が参加するものだが、竜王戦には、大会で好成績を残したアマチュアが参加可能な枠も存在する。本作は、月山が竜王戦のトーナメントを戦い抜いていく軌跡だ。

主人公が長命の吸血鬼であることの意味は、彼が人間の棋士たちと対比されることで明らかになる。老いることない存在が、何百年も研鑽を続けて一つの頭脳競技を極めようとしたら、どうなるのだろうか。じっさい月山はアマチュアにして竜王戦を勝ち上がっていくことになる。彼は人間というより、膨大な量の学習をした機械に近しい存在かもしれない。

何百年も時間をかけて研鑽した吸血鬼とは対照的に、たったの二十年前後で天才的な実力を備えてプロ棋士となり、そして百年も経たずに死んでいく人間の力強さ。彼らはみな天賦の才と、そして常人ならざる努力を重ね、勝ちも負けも全て自分一人で背負い込んで一局一局を戦い抜いていく。

人が限られた人生の中で極みを目指すという、AI にも、吸血鬼にもできない行為にこそ、確かな価値がある。それはきっと将棋だけではなく、人が命を燃やすような営み、その全てにおいて。

(荒砥)

(全 8 巻 第 1 巻 税込 715 円)



アフターゴッド

江野朱美著
小学館

本作の舞台は神々の侵攻によって危険区域と化した東京。親友の仇を伐つために神殺しを誓って上京した少女・和花は、対神研の獣医師・時永と出会い、神との戦いに巻き込まれていく。

魅力的な敵キャラこそが名作漫画の条件だというのなら、本作は間違いなく名作だろう。感情という病を患ったゆえに仲間から追われた蛇神・ヲロカピ、薬物を同胞に蔓延させた罰で人間の身に堕とされた神・アルラ……異能の神々は、どこか人間らしいのだ。人間を模倣した神が愛に傷つくとき、人間の脆さが逆説的に浮き彫りになる。私たちはか細く、鈍く、歪んでいて、それなのに倫理的で、愛することを諦めようとしないう曖昧な生き物だ。——「僕の頭は愛を求めているも 僕の身体は愛を求めない」「辛いね。心と体が逆方向に走ってて、引き裂かれてるくらい」

鬼才・江野朱美が圧倒的な画力と緻密なプロットで描き出すのは、人間のエゴ、愚かしくもありふれた暴力、世界の誰とも分有できない欲望と絶望。そして何より、途方も無い大きさの愛。思えば、私が彼女に一目惚れした前作『亜獣譚』の根底にも、血生臭い世界には純粋すぎるほどの愛の両義性があった。江野朱美は、愛の歪さから目を逸らさない。その歪さごとく平らげて共に居続けるのだという覚悟とともに——「痛みや苦痛がまたお前に戻る前に、私がお前を食べてやる」

本作は 18 カ国で翻訳され、世界的にも高く評価されている。マンガ大賞にも 4 年連続でノミネートされた実力作だ（でも、もっと上位に入って然るべきだと思う）。私たちはこの物語の続きを見逃すわけにはいかない——「未来の報酬を夢見て よく生きる」（浅煎り）

(既刊 10 巻 第 1 巻 税込 770 円)



ありす、宇宙までも

売野機子著
小学館

4月1日に飛び立った宇宙船オリオンは、有人飛行としては半世紀ぶりに月へ向かった。現在フェーズⅡにあるこのアルテミス計画は、人類二度目の、そして女性初の月面着陸の夢をアポロより引き継ぐ。そんなアルテミス世代の一人、朝日田ありすは日本人初の女性宇宙飛行士コマンダーを目指している。



バイリンガル教育の途上で両親を亡くしたありすは、英語も日本語もよくわからない。わかるのは「つかれた」ということだけ。ありすの状況をセミリンガル状態と看破し、君を賢くしようなどと言い出したのが孤高の天才、犬星くん。夜空の道標シリウスがごとく、彼は宇宙飛行士を目指すありすに併走する。

はじめは色の話。ありすは色がわからない。緑りんごと言うとみんなに笑われる。だが犬星くんはこう言う「空や海を青いと感じるのは、青という言葉があるからだ」。本書ではガイ・ドイッチャー『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』が参照されている。二人は目に映る色を拾って歩く。ありすの中に言葉が増え、世界の輪郭はクリアになっていく。

そして訪れたチャンス、アメリカでのスペースキャンプ。世界各地から集められた子どもたちに共通語禁止ルールが課される。母語での自己紹介に、自分の言葉で語る子どもたちのふるまいの変化に、英語話者らは驚く。

言葉が人を作るのだ、世界を作るのと同様に。言葉を尽くして課題に取り組む中で、ありすは「つかれた」の中に怒りがあったことに気がつく。そうやって彼女は少しずつ自分の言葉を見つけ始める。そして第一章終盤、一つの言葉に辿り着く。それは彼女のための希望の言葉、「夜は毎日来る」。(ひるね)

(既刊6巻 第1巻 税込770円)

隙間

高妍著
KADOKAWA

台北に暮らす女子大学生楊洋。慕っていた祖母を亡くし、思いを寄せていた男性「J」に恋人がいることを知った彼女は、失意の中、交換留学生として沖縄に渡った。この作品は、彼女が沖縄で過ごした一年間を描く、まぶしいほどの青春の物語だ。だがその輝きの中に、歴史と政治は最初から織り込まれている。



楊洋がJと出会ったのは、二二八和平記念日のデモだった。二二八事件とは、1947年に中華民国政府が引き起こした民衆弾圧であり、台湾現代史の出発点ともいえる出来事だ。台湾に生きる若者にとって、自分が何者であるかという問いは、いつも歴史と地続きなのだ。

沖縄で暮らすうちに、楊洋はこの地と台湾の似姿に気づく。琉球王国として独自の文化を持ちながら日本に統合され、沖縄戦を経て、今も基地問題に揺れるこの島もまた、台湾と同様に、大きな力の狭間で自らの存在を問い続けてきた土地だ。

読んでみると、何度も自らの無知を恥じ入った。日本はかつて台湾を統治し、その歴史の一端を担ってきた。知らなかったことの重さを、読みながら感じずにはいらなかった。だがこの作品は、その重さを押しつけない。楊洋もまた無知を内省するからだ。「私は何も知らなかった…… “かつて”の私は何も知らなかったかもしれない でも——」。多くの人に助けられ彼女はその先へと進んでいく。

この作品は、作者・高妍自身の沖縄留学の経験の色濃く反映した私小説的な漫画でもある。だからこそ楊洋の奥には、常に作者のかつての葛藤が見える。無知は恥ではなく、向き合うことの出発点なのだと、知ろうとする読者の背中をそっと押す。(たいやき)

(全4巻 第1巻 税込902円)

つくもごみ

panpanya著
白泉社

つくもがみ、という言葉がある。漢字にすると「付喪神」。長い年月を経た古い道具、おそらくは使い手の痕跡や思い出が深く刻まれているであろうその古道具に宿る精霊や靈魂、妖怪や神様のことをその言葉は指すらしい。物にも魂は宿る、だから道具ひとつを大切にしないさ——そうしたアニミズム的な思想がこの一語には込められているのだろうか。

だとすれば、「がみ」を「ごみ」に変形させた本書のタイトル「つくもごみ」はこう解釈できるだろう。すなわち、ゴミに宿った魂、と。事実、計 17 篇からなる短篇漫画集である本書の表題作で躍動するのは、子どもに捨てられゴミとなったぬいぐるみである。「本当に大切にされたぬいぐるみには魂が宿ることがあるという……」。ゴミの山のなかから息を吹き返したぬいぐるみは、人間と一緒にゴミの回収作業に精を出す。人と物とのあいだに芽生えた友情——しかしその魂には一週間というリミットがあり……。

やはりと言うべきか、本書を読むと気づくのは、その世界の主役は「人」ではないということ。ゴミや古道具、あるいは何気ない町並み、そうした「物」たちがその世界の主役なのだ。それを表わしているのが絵の描き分け。人間はラフなスケッチ風に薄い線でさらっと描かれる一方、その人間が歩く町並みやそれを構成する事物はじつに緻密に濃い線で描かれる。「物」は「人」を際立たせる背景ではもはやない。本書ではその逆なのだ。

脱人間中心化された世界——そう言うこと大げさかもしれないが、人間以外のものへのまなざしから生まれたこうした漫画のあり方はとても「令和的」ではないだろうか。(ばや)

(196 頁 税込 1430 円)

この世は戦う価値がある

こだまはつみ著
小学館

役に立つ人間になりたい。それが 25 歳会社員、伊藤紀理にとって自らの生を肯定できる唯一の価値だった。職場のセクハラや彼氏のモラハラにも笑って耐え、己を捧げるだけの日々。自死を決意したあるとき、偶然手にした臓器提供カードが運命を変える——数日後、紀理は短く切った髪を染め、掃きだめの職場に別れを告げて、金属バットを手に浮気中の彼氏のもとへ乗り込んだ。あたしは死ぬ時に 11 人の命を救う。だから好きに生きる権利を持った。彼女の人生は、決算というかたちで動きだす。

不可解な理屈だが、紀理を取り巻く問題のすべてがここに集約されている。元々明るかった彼女の自己認識は、幼少期に弟が病死して以降、周囲の大人たちの眼差しによって歪められてしまった。紀理が自らの人生を取り戻すには、認知を蝕み続けていた「他人の役に立つ」という呪いを、「(死ぬ時に) 他人の役に立つから」という理屈で掛け替える必要があったのである。翻って云えば、その論理に則っている限り、「役に立つ」ことを存在の価値とする認知に彼女は依然として囚われ続けていることになる。だから、新たな人生の契機となった(屁)理屈は、最後には彼女自身によって乗り越えられなければならない。

過去と対峙する物語。その主人公は紀理だけでなく、登場人物各々がそれぞれに過去を抱えて生きている。私たちだってそのはずだ。そんな彼ら/私たちに必要なのは、自らを苛む過去や他者と分かれ合うことでも、なかったことにすることでもない。抑え続けてきた自分の気持ちから目を背けず、過去を過去として終わらせること、そのために、恐れず他者と向き合うことなのかもしれない。(猫足)

(全 5 巻 第 1 巻 税込 770 円)



新刊コーナー

ゲンロンY創刊号

ゲンロンY創刊号編集委員編

ゲンロン



日本には総合雑誌という文化がある。

名が体を表すごとく、世の中のあらゆる現象を取り扱うのが魅力の総合雑誌。しかし今物価高で本は売れないし、いわんや雑誌をや。

そんななか「総合雑誌」をしょって立つ新たな雑誌、それも批評誌が創刊された。それがこの『ゲンロンY』である。

発売前重版ですでに二万部という、批評誌としては異例の売れ行きを示している本書は、論考が一七本、座談会記事が三本と、創刊号ゆえか気合いの入りが感じられる構成となっている。が、気合いだけではない。編者と著者のほとんどが九〇年代生まれ（最年少は二〇〇一年生まれ）という若さゆえの大胆さにも溢れている。評者としては、同世代の人たちが何を考えているのか素朴に気になって読んでみた。

ハンドメイド、ラップ、陰謀論、瀬戸内海

……と取り上げられるトピックは多岐に及ぶ。さながら社会（世界？）全体を見えるかそうという気概の裏には、しかし論考どうしが実は部分的につながり合うという細やかさもある。例えば表紙に象徴的な、「手」や「指」というターム。何かをつくる、マイクを持つ、スワイプする、そして物を書く。（スマホ世代の総合誌）という看板は伊達ではない。それは、一日何千回ものスマホの操作に慣れてしまった我々の手指を、新たな方向へ開いていくためのリハビリでもあるだろう。その大胆さと気概を、まずは喜びたい。（倉井）

（三八四頁 税込三〇八〇円 3月刊）

虚弱に生きる

絶対に終電を逃さない女著

扶桑社



世の中は体力のある人に有利にできています。また、お金とちがいで、体力に富んでいるからという理由で疚しさをおぼえる人はまれです。体力の富裕が当然視されるくらいで、それに乏しく、かといって病気ででもない「虚弱」な人の存在は無視されがちです。

そんな虚弱さに焦点を当てた本は、このエッセイ集が初めてかもしれません。一九九五年生まれの著者はいかにして「二日三時間×週五日、年収百万未満」の生活に辿りついたのか、その経緯が説得力をもって語られています。

評者が注目したいのは、本書の中で「頑張る」という言葉がほとんど用いられていないことです。全体をとおしてわずか六回、約八万字中一八字。この占有率の低さは、人並みの健康を手にいれようとストイックな努力をつづける内容にたらずして、驚くべきものです。その要因は、「頑張る」という語を適切に用いるためには実はいくつかの条件を満たさねばならない、ということにあるように思われます。たとえば「他の誰かのために」「一日八時間は働いた上で」あるいは「ライフステージに合わせて」というような。

その意味でこの語には、「体力がなくても、お金を稼げなくても、独り身でも、それなりに幸せな女になってみたい」という著者の願いの切実さを捉える力が欠けています。

本書には、誰もが挨拶のように「頑張る」と口にする社会の中で、虚弱な体をひきずって、その言葉の通用しない空間を押し広げていく姿が記されています。（投稿・貸出更新）

（二二二頁 税込一七六〇円 11月刊）

外の世界の話聞かせて

江國香織著

集英社

南天文庫はあやめさんが開いている私設図書館のような場所、保護者の同意を得て会員となった子供たちが自由に本を読んでいる。三歳のときに初めてここに来た陽日も、もう高校一年生。学校帰りに習慣のよう



うにここに寄る日々を過ごしている。

陽日にとって、南天文庫は「物語専用の場所」である。「家や学校や電車のなかで本を読むと、物語は本のなかだけにあり、本からすこしでも目を離すとそこは普通の現実だと感じるのに、ここでは違う。ここはすべての本とつながっている場所、現実から遠く隔てられ、守られている」。

あやめさんはときおり陽日に言う「外の世界のことを話して」と。だから陽日は、学校のこと、サイゼリヤのこと、ネットフリックスのことを話す。陽日としてはあやめさんの子供のころの話を聞く方がずっとおもしろい。「とても愛っているからだ」。

あやめさんは子供のころ放置された元公民

館に住んでいた。両親の他に、二組の夫婦とその子供たちと共に一つ屋根の下に暮らしていた。それが不法な居住だったことも、勝手に電気をひっぱってきていたことも当時は何も知らなかった。ピンクの家と呼ばれるその元公民館で暮らした時間を、あやめさんはときどき話してくれて、ときどき口を嚙む。

物語は至って平穩。アクシデントは起こらない。しかし浮き足立つこの感じ。「江國香織」を読んでいると強く感じる。まるでインドネシア式コーヒー。薄い、だが香りのよいあの一杯。

(二四〇頁 税込一九八〇円 2月刊)

(ひるね)

みどりいせき

太田ステファニー 飲人著

集英社文庫



「あれは春のべそ。

まあ、そんなわけないし、もしそうなら、

みんないつか死ぬ、

ってことくらい意味わかんないし、わかんないものはすこし寝かせたい」と言われてこれが新しさかと納得する、それでいいのだから？ 帯には「文学新時代」、三島賞の選

評には、「主役は(…)バイパスそのもの」とあるが、じゃあ、雰囲気を目新しさだけあればそれでいいの？

冒頭をもう一度見直してみよう。するとそこに浮かび上がってくるのは意外に既視感のあるこの小説の姿だ。ここで主人公は春の投球を受け止めるべきキャッチャーとして現れ、死という問題を考えあぐねている。野球と死、これが見覚えのある青春物語の道具立てじゃないとすれば、一体何が？ 文体だって、言われた通り「寝かせ」として読み進めていけばすぐに慣れてくる。

むしろ注目すべきは野球だ。主人公が足を踏み入れることになる闇バイトの世界も、クラスメイトの野球部員とのすれ違いを使って描き出される。そして、最後の場面。春は主人公に向かってもう一度全力投球する。つまり、結末は冒頭の回復として理解されうるのだ。繰り返されるシーンの間に展開されるのが、挫折と疎外という物語であるからには、この小説はむしろ、高純度でオーストリア的な青春小説なのだ。でも、それは悪いことじゃない。繰り返される原型を確かに捕まえていることの証左でもあるからだ。口語と大麻に新しさを見出すのはやめにしたよう。新しさを讃えるだけって陳腐だから。

(コーク)

(二三三頁 税込七〇四円 2月刊)

『未来のイヴ』を
読みなおす福田祐大編
水声社「メンローパーク
の魔術師」トマス・
エジソンが、英国貴
族エワード卿のため

に科学技術を集結し、美しい理想の女性——
人造人間ハダリーを製造する。SFの嚆矢と
して語られることも多いウィリエ・ド・リラ
ダンの『未来のイヴ』（一八八六）。よく知ら
れた作品であるが、実は一筋縄ではないもの
がある。今日の我々が読むことのできる
「完成版」までに、一八七八年の草稿をはじ
めとして様々な段階的な異本が存在し、ハダ
リーという物語の核となる存在のあり方も大
きく異なっているのである。その相矛盾する
姿は完成版テキストの内部にも保存され、亀
裂となって立ち現れる。六人の著者による本
論集の問題意識は、ともすれば容易く見落と
してしまいかねないその複数性に焦点を当て
『未来のイヴ』の様々な相貌を浮かび上がら
せることにある。

この「読み直し」の作業には、なによりも
まずテキストの緻密な観察に立ち返る必要が

ある。たとえば、人造人間製造に関するエジ
ソンの雄弁な講釈のなかに、やかましいほど
に散りばめられた科学用語の数々。こいつい
たピースを丁寧に拾い上げ、作品の異本だけ
でなく、当時の作者を取り巻いていたメディ
ア史や文化史背景、科学的言説などと照らし
合わせて検討する（考古学編）。そのうえで
この作品の多彩な読みの可能性を提示する
（解釈編）。作品論として面白いのはもちろん
のこと、外在的視点を踏まえながら展開され
る微に入り細を穿つ分析は、文学テキストと
の向き合い方を示してくれる。（猫足）

(三三二頁 税込三八五〇円 3月刊)

国際社会学の技法

—考える・実践する・変える—

森千香子・南川文里・村上一基編
名古屋大学出版会

「国際社会学」と
聞くと、海外をフイ
ールドに調査を行う
学問だと考えるかも
しれない。しかし本
書を読むと、必ずし
も国外に出なくとも
、私たちの身近な生
活や関心の中にグ
ローバル規模で社会
の仕組みを考ええ
る題材が数多く存在
することに気づか
れる。

本書は若手研究者が性的マイノリティなどの
多様なトピックと国際的な話題を関連させて
書いている点特徴的だ。例えば、沖縄デ
ィアスポラの章では、辺野古米軍基地建設へ
の反対署名運動が世界各地の沖縄コミュニテ
ィを結びつけ、ホワイトハウスへの働きかけ
にまで発展した事例が扱われる。そこでは、
日本社会でマイノリティとされる人々が越境
的なつながりを活用し、格差構造を乗り越え
ようとする実践があり、国家の枠組みを超え
た、新たな視点から考えられることを示す。
それを通して、身近なニュースがより大き
な世界の仕組みの中にあることが伝わる。

さらに本書は、西洋中心的な知の枠組みを
問い直す姿勢を示す。つまり、従来の国際社
会学が、西欧諸国の戦後における外国人労働
者受け入れの経験を基盤に人の移動と統合を
論じることを述べ、その背後にある植民地主
義的発想を批判する。そして、自己の立場へ
の自覚と他者の視点の導入を通して、西洋中
心の視点に偏った理論からの脱却を目指す。

本書を読むことは、「国際社会学」を理解
するだけでなく、身近な他者へのまなざしを
見つめ直し、それがグローバルな現象と結び
ついていることを実感する契機となるだろう。

(二三五頁 税込二九七〇円 3月刊) (投稿・たまや)

すごい古典入門

アーレント『人間の条件』

なぜ働かなきゃいけないの？

戸谷洋志著

中央公論新社

今年一月から、中

央公論新社が刊行を

開始した「すごい古

典入門シリーズ」。



これは先人たちが遺した偉大な古典をその分野の専門家が非常に簡単に解説するシリーズである。その記念すべき二月号にラインナップされたのが、本書『アーレント『人間の条件』』だ。その副題には、「なぜ働かなきゃいけないの？」とつけられている。いずれ就職活動をするのが大半である学生にとって非常に魅惑的な題ではないだろうか。本書は、

アーレント『人間の条件』の主要な哲学的概念「労働」「仕事」「活動」を用いて、現代の我々が「なぜ労働を非常に高く評価するのか」、「なぜ労働によって個性が失われてしまうのか」を明快に説明する。さらに、そのことが我々の人生を貧しいものとしてしまっている可能性があることを指摘する。

いきなり「労働」「仕事」「活動」などと言われてもよく分からないだろう。安心してほしい。本書では、アーレントの研究者でもあ

る戸谷が『人間の条件』における主要概念を非常に分かりやすく説明している。『人間の条件』の入門書は既に幾つか存在するが、本書はその中でも群を抜いて易しい。百ページという手ごろな長さも嬉しい。哲学系、いや人文系の本を読んだことがないという人にもオススメだ。また、巻末にはさらに勉強したい人へ向けてアーレントのブックガイドも載せられている。最初の一冊として最適だ。

新学期が始まり就活に動しむ三、四年生、就活や労働に疑問を持つ、嫌悪感があるすべての人に是非読んでほしい。（投稿・チハヤ）

（二〇八頁 税込二一〇〇円 1月刊）

ベルクソン入門

村山達也著

青土社

アンリ・ベルクソン

（一八五九〜一九

四一）。「持続」や

「生の躍動」の概念



で知られる哲学者である。独特の時間観を持つ彼の思想はどこか西洋哲学史の王道から外れたところがあって、魅力的だが難解、時に怪しさを漂う異端として受け取られてきた。

——というのが凡そ一般的なベルクソン理解だろう。日本における彼の水先案内人・檜垣がベルクソン・ドゥルーズの現代思想的な系譜を強調してきたとすれば（これはこれで大層面白いのだけれど）、本書はベルクソンを正面から哲学するタイプ入門書である。

抑制的な文章だ。ベルクソンとの距離感が近すぎないとも言える。「この主張は評価できるが、論拠のこの箇所については無理がある」といった具合に、あくまでフラットな立場から彼の哲学的な方法と態度を論じていく。

では、ベルクソンの哲学を貫くものは何か——それは《存在するあらゆるものと私たちは直に触れ合っており、しかしその経験は私たちの言語や知性では容易には把握しがたいものであるという確信》。ゆえに、存在というものが時間の流れの内、しかあり得ないという一貫した前提から（持続！）、諸現象を捉えるための思索が展開されていったわけだ。

彼が生涯に手がけたテーマは自由論、心身問題、進化論、宗教論、社会論と多岐に渡る。ゆえにその一面のみを取り出す読みが主流であったが、類書にはないバランスの良さが持ち味である。ベルクソン思想を平明に説きつつもその可能性を拓く本書は、まさに「入門」を名乗るのに相応しい。（浅煎り）

（二九六頁 税込二八六〇円 12月刊）

ローマ人の心 古代帝国の実像に迫る

南川高志著
講談社選書メチエ



「亡き人の霊に。
私は存在しなかった。
私は存在した。私は
存在していない。私は
は氣にかけていない。ドンニア・イタリア、
二〇歳でここに眠る。」

本書は紀元一世紀から三世紀、古代ローマ帝国が最盛期を迎え、そして混乱が始まる時期の古代ローマ人の「心」を探る試論である。ローマの人々、そして属州の人々の「心」やアイデンティティのあり方に、文献資料、碑文、当時の政治・社会状況から迫る。

専門外の読者にとって最も興味深いのは冒頭にも引用したような墓碑銘に関する記述だろう。一、二世紀の古代ローマでは相当数の墓碑が作られ、現存している。そこから読み取れるのは夫婦、親子、兄弟の紐帯の強さ、より正確には、紐帯が強かったということのアピールだ。また、故人の職業や生前の業績も強調される。彼らは碑文を通して自分の存在が後世にも伝えられていくことを望んでいた。同様のことは、文献資料からも読み取れ

る。小プリニウスやタキトウスの著作からは二人が「忘却されることを恐れ、記憶を残したい」と言う「心」を持っていたことが読み取れる。最盛期ローマ帝国は「記憶の帝国」でもあった。しかし、時代が下っていくと、碑文の数は減少していくこととなる……。

あるローマ人は解放奴隷のために冒頭の墓碑を残した。人生の儚さを強調しながら、否だからこそ、ローマ人たちは自分たちの存在を後世へと伝えることを願った。そして実際に、彼らの生は、二千年の時を超えて私たちにも届いている

(三四四頁 税込二二〇〇円 2月刊) (荒砥)

破壊系資本主義

—民主主義から脱出するリバタリアンたち
クイン・スロポディアン著
松島聖子訳 みすず書房



私たちは、国境の内側はひとつの法的秩序で統一されていると考えがちである。

しかし著者は言う。「世界経済を理解するには、その『すき間』を見る必要がある」と。それは、国家の内側にありながら異なる法律で動く例外的な区域——無税の自由港、規制

のない特別経済区、タックスヘイブンといった「ゾーン」だ。本書はこうした場を作り出してきたリバタリアンの思想と実践を追う。

自由至上主義者たちは、民主主義を排して経済成長を遂げた香港を「持ち運び可能なテンプレートに仕立てた。シンガポール、ロンドン、ドバイ、アバトヘイト下の南アフリカや内戦で国家が崩壊したソマリアまで、民主的統制の届かない場所であればどこでもゾンの実験場となった。そしてシリコンバレーの億万長者たちは今、新たな経済活動の領域を海上やデジタル空間に夢見ている。国家を壊すのではなく、規制を脱し世界の枠組みを変えろ——それが「破壊系資本主義」だ。

しかしゾーンは、土地からも労働者からも脱することはできない。クラウドに逃げ込んだように見える資本も、データセンターを冷やす電力と、アフリカの向こうで動く低賃金の身体に依存している。さらにゾーンは国家から逃れるどころか、国家資本主義体制を採用する権威主義国家の立場を強化している。

「〇〇資本主義」には食傷気味になっていたが、本書が見せるのは抽象的な金融の膨張ではなく土地と身体に根ざした資本の実像だ。読後、国民国家などというものはとうの昔から穴だらけだったのだと気づく。(たいやき)

(二二六〇頁 税込三九六〇円 1月刊)

古文と漢文

—書き言葉の日本語史

田中草大著 ちくま新書

『古事記』『源氏物語』『徒然草』そして『雨月物語』といった中学、高校の「古典」の時間に学んだ作品に、明治時代の『舞姫』なども追加して、本書はこれら「古文」に目を向け、日本語の書き言葉の歴史を描く。

実に千二百年弱をカバーする「古文」。改めて考えると時代の幅が大きすぎる。しかし授業で使った文法書は一種類だったはずだ。

ここに日本語の書き言葉のおもしろさがある。

「書き言葉の口語化」とも言うべき明治の言文一致運動が示すように、日本語には文語と口語の間に大きな差異が存在した。言葉は常に変化する。だが、口語の変化の横で、文語については長らく平安時代の文法が使われ続けていたのだ。とはいえ、少しずつだが変化はしていた。本書は資料の時代差、使用域差を丁寧に拾い、その変化を記述している。

加えて重要なのが漢文。単に中国語文だと考えがちだが、読み下すことで古文の一種に位置付けられる。本書は、訓読＝漢文を日本語として読む方法に着目し、漢文を日本語の歴史の中で捉える視座を提供する。(ひるね)

(二八八頁 税込二〇七八円 3月刊)

小説の技巧

デイヴィッド・ロτζジ著

柴田元幸 斎藤兆史訳 白水Uブックス

小説の難しいところは、あまりに「読めすぎてしまふ」ところにある。たとえば一回物語の流れや描写に夢中になったなら、私たちはページを突き抜けてその向こう側にある世界ばかりを見つめてしまふ。

この本が教えるのは、その一歩手前に踏みとどまって、「夢中」の理由を知って驚くことだ。五十の項目(技巧)からなっており、それぞれに選りすぐりの(おもにイギリスの小説からの)引用が付されており、私たちはこの例文を見ながら、デイヴィッド・ロτζジの解説にうんうんと頷くことができる。

つまり、非常に教育的な本なのだ。たとえば第一九項「反復」では、ヘミングウェイの戦争を描いた短編の冒頭がこのトピックのものと詳細極まりない分析を施され、ある事実が浮かび上がる——反復に満ちたこの短編は、「死」という語を一度も用いていない! こういう慧眼を目の当たりにすることで、私たちは小説の仕組みの奥深さを学ぶことになる。次に読む小説は、不気味なくらい面白いはずだ。(コーク)

(三五〇頁 税込二四二〇円 3月刊)

日本の自然葬

風葬土葬から樹木葬循環葬まで

高橋繁行著 講談社現代新書

死んだら火葬されて、骨になる……日本では人が亡くなったら、大方この認識の通り茶毘に付される。しかし、日本では火葬だけでなく、自然葬も実践されているのである。

日本では火葬以外違法である、などと勘違いしている人もいるのではないか。しかし、日本で自然葬そのものは法律で規制されているわけでもなく、元々は自然葬も行われていたのだ。そして、本書は現在も行われる自然葬の実践、元々行われていたアイヌなどによる土葬、そして新しい自然葬の選択肢である循環葬が取り上げられる。

循環葬とは、遺骨から効率よく栄養分を吸収して、森を豊かにするという試みである。この実践が行われている森は、大阪府の能勢妙見山にある。ご遺骨をパウダー状にしたものを土と混ぜ合わせ、墓標を建てないことを特徴とする。

自然の一部である我々は、どのように自然に還元することができるのか。死した後には地球に還元されることができる弔われ方は、非常に魅力的だと感じる。(フナチ)

(一二三頁 税込一二二〇円 2月刊)

土地に根差した信仰と記憶をたどる人びと

中国と台湾、それぞれの土地に住み込んだ日本人研究者が、歴史がこぼれ落ちてきた民間信仰と記憶を掘り起こしている——
■ネットの海から珍神たちを拾い上げる

SNSを眺めていると、お隣の国から珍妙な動画が流れてくることがある。やたら元気のいい中年たち、見たこともない妖怪の巨大な像、怪しげな歌や踊り。廈門に住む民俗学者の太谷は『中国TikTok民俗学』（NHK新書）でその真相に迫る。彼が抖音（中国版TikTok）をスワイプして発見したのは、文化大革命で根絶されたはずの民間信仰が、二十一世紀のものとも、社会主義国家のものとも信じがたい——ほどの状況を呈している現実だった。



ある日太谷は通販サイトで逆立ちする男の像を見つける。抖音にはその男の巨大な石像の動画まである。「逆立ち張五郎」と命名したこの珍神を追う第一章は本書の魅力を凝縮している。動画の真相を追ひ湖南省の山中へ飛ぶも、そこはテーマパークだった。現地の人びとと話し、たらい回しにされながらも、やがて張五郎の呪文を唱えながら家々を回る芸人に出会い、生きた鶏の血を神に捧げる儀式の現場へとたどり着く。調査はいつも行き当たりばったりだ。

ワールドワークの空振りも正直に書くその軽快な筆致の奥に、一般の人々が自ら動画を撮り投稿していく行為を「大衆が自らの手で民俗誌を編みはじめた」と捉える鋭い視点がある。セクシーな九尾狐、逆輸入される日本の大黒天、増殖する死神・無常——掘れば掘るほど出てくる神々を、太谷はスマホ一台で照らし出していく。

■南の果てに息づく記憶と伝承

高雄に住む台湾文学研究者・倉本知明の『フォルモサ南方奇譚』（春秋社）は、高雄・屏東一帯の山道や集落を回りながら拾い集めた、歴史と伝承の記録だ。

「台湾」と聞いてまず思い浮かべる台北や台南より南に広がる「ディープサウス」は、日本の書店に並ぶ台湾本にはほぼ登場しない。だが倉本に言わせれば、そこには奇譚が溢れている——清朝・日本・中華民国と支配者が交代するたびに正史からこぼれ落ちた、人々の記憶と伝承が。



コロナ禍に日本と台湾の往来が断たれたとき、著者は台湾に骨を埋めるかもしれないという感覚が急にリアルになったという。この土地で生きていくために何が必要かを問い始め、バイクを走らせた海を渡って台湾に流れ着き、祀る子孫も持たずに異郷の土となった移民たちや、支配者が交代するたびに歴史から消された死者たち。倉本もまた海を渡った一人として、彼らと無縁ではいられない。

本書が掘り起こすのは、表の歴史が黙殺してきた物語だ。アヒルを飼いながら皇帝を名乗った男、高雄に住まう二匹の龍と治水、帝国の支配に最後まで抵抗した土匪。どうしてこの島にはこれほど廟があるのかと台湾の友人に尋ねると「申し訳のたないことが多いからだ」と返ってきたという。祀る子孫を持たずに死んだ者を鎮めるために廟を作る、それが生者の務めだというわけだ。書くことも同じだ。忘れられゆく者たちの逸話を拾い集め、記述する本書は、台湾を生きる倉本なりの弁明なのだろう。

（たいやき）

「ゼン、ゼンデジ、アザディ」イランに生きる女性たち

現在の中東情勢は、主に石油の高騰などで我々の日常生活にも影響を及ぼしている。これは、遠い海の向こうで行われている争いが、決して彼らだけのものではなく、我々のものでもある、ということを示唆している。確かにイランは、国としてはハマスを支援し、ガザを苦しめる存在なのかもしれない。しかし、その国民は国家を支持しているのだろうか。ここでは、一九七九年のイラン革命以降、自分たちの命を懸けて闘うイランの女性たちを描いた本を紹介する。

『テヘランのすてきな女』（晶文社）は、著者が二〇二三年にイランの首都テヘランに住む女性たちにインタビューを行い、書いた本である。特に顕著にみられるのは、二〇二二年の反スカーフデモ（女性、命、自由^{ゼン、ゼンデジ、アザディ}）の運動以降のイランでの変化である。地方からテヘランに遊びに来ていた一人の女性がヒジャブを正しく被っていないという理由で拘留され、警察の拷問により死亡した。この事件を受けて、イラン全土でデモが発生。数ヶ月で六〇〇人近くが殺される事態にまで発展した。これ以降、風紀警察自体はいるものの、市民も警察も互いに干渉し合わないようになっているのである。この変化は、イランの女性と若者をはじめとする人々の声が、国家権力を変えた明確な一例である。それ以外にも、様々な職に就いている女性が自らの国家やイスラムに対して何を思うのか、赤裸々に書かれている。衝撃的なのは、ヒジャブの着用が義務付けられているほどイスラム規範の厳しい国なのにも関わらず、敬虔なムスリマは本作に出てくる二十四人中一人だけであるということだろう。

二〇二三年の事件以前から、抑圧的な政府に対して闘い続ける女性たちがいる。その筆頭がノーベル平和賞を受賞し、現在もイラン

で不当に投獄されている『白い拷問』（講談社）の著者、ナルゲス・モハンマディ氏である。彼女は、身内が処刑されたことから政府に対して疑問を持ち、学生運動に参加し始めた。以降、十三回逮捕された彼女は白い拷問の経験者・被害者であり、彼女の獄中手記と、同じく白い拷問を経験した十三人の女性たちが刑務所で紡いだ言葉が記されている。

白い拷問とは、「長い時間をかけて、囚人のすべての外部刺激を奪い去る。その手法は独房監禁と尋問で、主に思想犯や政治犯に対して使われる」と説明される。独房外での目隠し、照明の操作による時間感覚欠如、一辺三分ほどのコンクリートの床と壁、男性刑務所への収監、物理的暴力、言葉による拷問……我々が想像し得ない、人間に対してできるあらゆる拷問が、精神的不調はもちろん神経疾患や心臓発作を引き起こす。そしてこれは刑務所を出所した後も、ダメージを与え続ける。

なぜ、イランの女性たちは身体と人生を犠牲にしてまで声を挙げ続けるのだろうか。彼女が獄中からノーベル委員会に宛てた手紙にその理由が示されている。

世界はこの新しい革命的な「女性、命、自由^{ゼン、ゼンデジ、アザディ}」という動きが、イランにおけるたゆまぬ政治的抵抗運動の証であり、社会に普通の生活を取り戻すための闘争であることを知っています。この運動の核は、イラン女性の主体性にあると言えます。……我々イラン人は、民主主義と自由、人権、平等を求めています。専制的な神権国家ではない、国民にふさわしい国になれるよう、イランの栄光と誇りを取り戻したいのです。

（フランチ）

編集後記

たとえば、心血を注いだゲームの終章。
たとえば、北風に飛んだお気に入りのシャツ。
たとえば、共に笑いあった朋友との別れ。
——あるいは、もっと、非情なかたちで。

人生には、絶えず終りがつきまとう。人生別離足ルなどと嘯いてみせたくもなる。終りの刻を見届けられることもあれば、ふと目を離れた隙に、どうしようもなく何かが終わってしまうこともある。いずれにしても、後悔ばかりが降り募る。それでも、私たちのそんな感傷など我関せずと、素知らぬ顔して明日はやってくる。否が応でも生活は続くものだ。

過去というのは厭な亡霊だから、そうして今を生きる外ない生者の歩みに影のように付き纏うわけで、その虚ろな双眸に見入られれば、足も竦む。苦しくもあるし痛くもある。だが、だからとて、別に頸などは括らんでよろしい。括るなら、せめて、肚だ。一切万事、終りが必然なのであれば、過ぎ去った終りには手を振りながら、来るべき終りに向けて、せいぜい強がって足を踏み出してみせるしかない。人間、それくらいしか出来ることはない。その先に何かがあると、ほんのちょっぴりだけ希望を抱いて。だからこそ、金田盾よりも、柳の一枝をその手に託そう。

——友よ、健やかに道を往くがよい。(猫足)

当てよう！ 図書カード

今回の特集は漫画でした。「マンガの神様」として知られる手塚治虫は関西出身で、阪大の医学部を卒業し、医師免許を持ちながらも漫画家の道を選んだ人物です。それでは、彼の出生地が現在属する市はどこでしょうか。

1. 宝塚市 2. 伊丹市
3. 豊中市 4. 箕面市

(たいやき)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは6月15日です。



《1・2月号の解答》 1・2月号の問題の正解は、4. のミシシッピ州でした。いわゆる深南部、ウィリアム・エグルストンの写真集『フォークナーのミシシッピ』に写し取られたようなあの光をいつかみに行ってみたいものです。図書カードの当選者は、エバーグリーンさん、けるりさん、しまねこさん、えび天天さんの4名です。当選おめでとうございませう。(コーク)

読者からひびく

○新学期ですね

(院・みーむ)

——コメントありがとうございます。春休みで静かだった学校が急に賑やかになって驚いています。毎年驚いていることにも驚いています。意外と慣れませうね。

ともあれ新年度です。前年度の負債は無かったことにして。仕切り直しといたたいものです。それで利子だけでも返せたなら儲けもの、ってことで。

○生協にてふと手に取った面白そうな書評がたくさんありとても満足。

(法学部・美馬駿)

——手に取っていただきありがとうございます！ たとえばルネとかだと、ひっそり置かれていて見過ごされがちかも……と思うこともあるので、ぜひ周囲の読書好きに(そして、これからそうなりそうな潜在的読書好きに)、宣伝、配布、押し付け、などなどさまざまな方法で綴葉を広めてくだされば幸いです。

ちなみにもうご存知かもしれませんが、ルネには綴葉で扱った本がまとめて置いてあるコーナーもあります。本誌片手に立ち読みというのもオツかもしれません。(コーク)